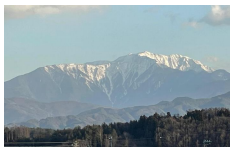
ああ　遠くの空は　晴れている



ＮＯ３８　　南箕輪村教育委員会

「思いやりと頼もしさ」を感じた、広島平和学習研修報告会

10 月 1 日に実施された研修報告会、参加者は、プレゼンテーションソフト、新聞形式、詩の朗読といった、様々な形で、「自己テーマ」について学んだことを堂々と発表しました。

出典：10/9　長野日報



平和の大切さ分かち合う

村教委 広島平和学習報告会

南箕輪

南箕輪村教育委員会は1日夜、8月に実施した広島平和学習の報告会を村民センターで開いた。広島を訪問した小学生5人と中学生7人が体験を通して考えたことや学んだことを発表し、保護者や教職員、村議、村民ら約40人と平和の大切さを分かち合った。

広島平和学習は、戦後80年を機に戦争や核の悲惨さを体験者から直接聞く機会を設けようと、昨年初めて行われた。今年は村内の小学4～6年生と中学1～3年生が事前学習を経て、8月5、6日の日程で広島市を訪問。原爆ドームや広島平和記念資料館を見学し、体験者の証言を聞いたほか、平和記念式典や児童生徒が集う「全国こども平和サミット」に出席した。

報告会では一人ひとりが自身のテーマに基づいて学んだことや考えたことを発表。「私たちは被爆者から話を聞ける最後の世代。この経験を生かしてクラスのみんなに伝えたい」「核兵器が及ぼす影響の恐ろしさを次世代の私たちがどのように伝えていくかが大事」などと訴えた。

南箕輪中3年の真野悠来さんは自作の詩「アイゴ、アイゴ」と「知らない、それでも」の朗読を交え、絶望と困難の中で被爆者を支えた人々を紹介しながら「原爆で苦しんだ分だけの人の温かさや優しさが隠れている」と指摘。「核兵器をなくすことや、完全な平和を今すぐ実現するのは難しい。でも、『人に優しく、思いやりを持とう』というバトンは普段の行動でなくことができる」と結び、日常の中で小さな優しさを積み重ねる決意を語った。（廣沢宏）

広島市で感じたことを自分の言葉で発表する参加者。大勢の大人が耳を傾けた

知らない、それでも

南中　３年　真野　悠来

知らない。知らない。
私はあの夏の日を知らない。
燃え盛るキノコ雲も、一瞬で消え去った街も
熱線に焼かれた、想像もできない皮膚の痛み
病へと姿を変えて今も残る、黒い雨に放射能

資料館の絵と写真が、私に語りかけてくるようで、
ぎゅっと胸が締め付けられた。

「助けてくれ、助けて・・・」
「水をください、水を・・・」
声を必死に絞り出し、泣き叫び、消えゆく命。
皮膚はただれて、目玉が飛び出て、内臓も破れ
赤く、黒く燃え尽きていく無数の人。

「いってきます」
「いってらっしゃい」
今朝交わした、いつもの挨拶。
「もう知らない！」
喧嘩したまま、二度と戻らなかった大切な人。
「ただいま」
「おかえり」
消えた世界で、残された人の底なしの悲しみ。
もう聞こえな。
もう帰らない。
もう二度と逢えないなんて。

私は何度も、何度も、言葉を失う。
あなたの苦しみの、底にすら届かないから。
生身の痛みを、何ひとつもっていないから。
だから、簡単に言えない。言ってはいけない。
そう思う私がいる。

「大変だったんだね」なんて。
「つらかったね」
「痛かっただろうね」なんて。
そんな軽い言葉では、片づけられない。

私は何ひとつ、知らない。
私は、あの日の何ひとつも持っていない。

けれど。

絶望の地獄で差し出された、優しさは
「生きていて」と泣きながら傷を包んだ愛の手は、
思いやりの心は決して消えないことを。
私は知ることができる。
あの場所で生まれた「優しさ」を、
受け取ることはできる。

忘れていく「時間」という波に、
この歴史を渡してはならない。

受け取った温もりを、次の誰かへ繋ぐこと。
目の前の誰かに思いやりを、平和を差し出すこと。
それこそが、あの日途絶えた無数の命と
痛みを抱えて生き抜いた人たちへ
私ができる答えだから。

知らない。私はあの日を知らない。
それでも、私は語り継ぐ。
私の言葉で。
私の声で。

見たことない、あの日のヒロシマの空を。
もらった優しさを、
胸に、抱きしめて。

広島平和記念資料館で展示を見た後、真野君は被爆体験を聞きに地下に急いだ。被爆の深刻さとその中にあっても存在した優しさに触れ生んだ詩。

【尾形教育長の話】

一人一人の発表、内容面も発表する姿も素晴らしかった。「思いやりと頼もしさ」があり大いに感動しました。自己テーマについて、自分の目で見て、耳で聴いて、心で感じたことを自分の体の中で一旦咀嚼して、自分の言葉で表現していたので、説得力がありました。緊張したと思うが、堂々とやり遂げた自分を、もう一人の自分が「よくやったな」とほめてあげてほしい。自分の中に、もう一人の自分を育てることが大切です。

広島の空が８１年間青いのはなぜか？　原爆ドームが立ち続けているのはなぜか？　原爆の子の像に多くの千羽鶴が届くのはなぜか？　多くの問いがあります。その問いに立ち向かうには、「自分の頭で考えて判断する力」と「自分の言葉で表現する力」が求められます。自己テーマを設定して追究する中で、この２つの力が発揮されていました。

平和を維持するにはどうすればよいのか？　その答えが、今日の皆さんの発表の中にあったと思います。日々の生活場面の中で、具体的に心がけていきたいと思います。本日の発表、よく頑張りました。

○　南小６年　池上舞音さんの「ひろしま新聞」

長野県こども新聞コンクール　応募用紙

いずれかに○をしてください　1・2年の部　3・4年の部　5・6年の部

南箕輪村立南箕輪小学校　6年　4組

ふりがな　いけがみまいん

名前　池上舞音

ひろしま新聞

発行者　南箕輪小学校　6年4組　池上舞音

私が見た広島

～広島から届いたメッセージ～

私は、南箕輪村の広島平和学習に応募して、今年の8月5、6日に広島を訪れ学んできました。

なぜ広島だったのか

1945年8月6日午前8時15分、強力な破壊力を持つ核兵器、原子爆弾が広島に投下され本とアメリカなどの国々が戦争をしていました。アメリカは、原爆が14万人の人が亡くなったとされています。被爆者はの候補地として新潟、小倉（現在の北九州）、広島を選びました。そして最終的に原爆を落とす目標を広島に決めました。

原爆ドーム

広島県産業奨励館

広島県産業奨励館として建てられました。原爆ドームと呼ばれるようになったのは、爆風や熱線、頑丈そうに見えるこの建物が当時の人々の心の支えとなっていたからです。

原爆の子の像

インタビュー　広島の人に聞きました

Q　広島のどこが好きですか？

A　「下町の風景が好き。」

Q　広島の自慢は？

A　「お好み焼き。」

編集後記～広島から未来へ～

平和記念資料館では、写真を撮るのをためらってしまう展示がありました。被爆者の95才の方のお話を聞いて何年たっても心の傷は消えないし、道や川には死体だらけだったと聞いて怖くもなりました。私達は被爆者の生の証言を直接聞くことが出来る最後の世代です。直接聞くと、数冊の本やテレビで学んだつもりでいた事よりも、その場にいたからこそ語れる生々しさが伝わりました。世界に一万発以上ある核兵器を私達が無くす事は出来ないけれど、この思いを未来へつなげて、いつか世界から核兵器が無くなる事を願います。核兵器が無くなった時に平和記念公園にある平和の灯の炎が消されるそうです。

広島に実際に行って、現地で資料を見たり体験談を聞いたりすることで、知っているつもりだったことが浅い情報であったことを実感し、より深く学べた思いから作成した新聞。悲惨さを強調するだけでなく、復興や誇りを持てる地にしたいと願う広島の人々の逞しさや明るさを「インタビュー」記事にまとめた。

〇南部小６年　船越伊織さんのプレゼンより（部分）

広島学習のテーマ

・原爆ドームがなぜ残ったのか
・原爆ドームはなぜ残されたのか

このテーマにした理由

広島に行く前は原爆ドームの事しか知りませんでした。
広島の原爆の象徴となっている原爆ドームが残っている理由を知りたいと思いました。
ほとんどの建物が倒壊した中なぜ「原爆ドームだけが残ったのか」、「原爆ドームはどのような経緯で保存すると決められたのか」、この二つの疑問の答えを知りたいと思ったので、このテーマにしました。

原爆ドームがなぜ残ったのか



原爆ドームはもともと広島県産業奨励館という名前でした。この建物はは特別丈夫ではありませんし、爆心地から南東１６０ｍの位置にありました。

なぜ原爆ドームが倒壊しなかったのか

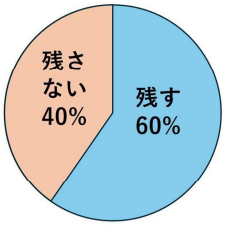
・窓が多く、窓が大きかった
・上からの強い爆風が下へ抜けたため、衝撃が分散した

これらの理由から奇跡的に倒壊は逃れたそうです。

原爆ドーム残すか残さないか議論

太平洋戦争終結後すぐに、原爆ドームを残すか残さないかの議論が始まりました

原爆ドームを残すか残さないかの意見の割合



原爆ドームを残すか残さないかの意見・理由

残す派の意見	・もう他の人にこんな思いをさせてはならない。 ・原爆を使ってはならないと伝えなければ。
残さない派の意見	・原爆ドームを見たくない。 ・悲惨な記憶を思い出す。 ・もう忘れたい。

議論が続く中、一人の少女の言葉が市民の心を動かしました

議論を大きく動かした一人の少女の日記



かじやまひろこさん（当時15歳）

かじやまひろこさん
1歳の時、爆心地から約1.2キロの広島市の自宅で被爆しました。けがもなく元気に成長したが、16歳の時に急性白血病を発症し、亡くなりました。

亡くなる約8カ月前の59年8月6日
かじやまひろ子さんの日記にはこのように記されていました。

「あの痛々しい産業奨励館だけが、
いつまでも恐るべき原爆を世に訴えてくれるだろうか」

この言葉に心を動かされた広島おりづる会の小中高生たちが中心となり、原爆ドーム保存を求める署名活動や募金活動を大々的に開始しました

議論を大きく動かした一人の少女の日記

この折り鶴の会は1965年には、集まった１３００人の署名と保存義を広島市に直接提出しました。
この活動によって１９６６年７月に満場一致で広島市議会により永久保存が決まり、１９９６年に世界遺産に登録されました。



この答えは資料館で原爆ドームの事を学び、まだわからないことがあったので広島平和学習のガイドの方に話を伺い、聞くことができました。

感想

被爆した方々の心の傷はもう癒えないかもしれない中、平和を後世に伝えている被爆者の方々は本当に尊敬します。
広島平和学習を終えてこれからはこの体験を一生忘れないで大人になっても常に平和を意識し続けたいです。
今すぐ戦争を止めることはできないけど、家族や友達に話したりすることは今からでもできます。
広島おりづるの会の小中学生たちのようにそういった積み重ねによって本当の平和は1日でも早く実現されるものだと僕は思います。

いわゆる負の遺産をどう残すかは、例えば、東日本大震災の遺構などのように現代でも論議の的となる。「もの」のを通してその背景に人間の営みや思いを感じ取れるので、直接体験をした人にとっては、つらく悲しい思いを呼び覚ます「もの」になる。平和記念公園をガイドさんの案内によって見て回った後、解散になっても、さらに質問をしたいとガイドさんに問いを続けた船越君の強い思いがプレゼンに結晶した。

○南中２年　北澤莉衣奈さんのプレゼンより（部分）

自己テーマの変更

学習に行く前：熱線・爆風・放射線のエネルギーについて知る

現地での学習：実物を見る、実体験を聞く

→印象に残る・胸を打たれる

現地学習後：なぜ平和記念公園が作られたのかという疑問

被爆者の願いを受けての考えや正しい情報を

どう発信していくか

資料館から

私たちは被爆や戦争を経験していない

→当時の方々心身の痛みはわからない

資料館見学→飾られていた写真や遺品から当時の辛さがひしひしと伝わってきて、胸を締め付けるような思い

当時の方々の心身の痛みのすべてはわからなくても資料館を見ることで、壮絶さを感じ取ったり、自分が痛いような感覚にもなった。見たからこそ感じたことがあった。

被爆者の方のお話から

学校に行って勉強ができる、友達と楽しく会話ができることは決して

当たり前ではない←戦争があったらできない

・被爆者の方々の高齢化が進む中、実体験を聞ける「最後の世代」

・ロシア・ウクライナ戦争の現状

→私たちがあの日の悲劇を正しく伝えていく必要がある改めて意識

感想・考え

原爆が落とされた”あの日”は戻ってこないけど

私たちが”あの日”を繰り返さないことはできる。

→そのために自分の考えを深めながら周りに発信して

平和な世の中にしていきたい

展示された「もの」を通して、被爆体験を聞く体験を通して、その実態の深刻な状態を知り、さらにそこから、なぜそうした「もの」を残そうとしたのか、なぜそうした残酷な体験を語ろうとしたのか、そうした人たちの思いにまで、広島を訪れた学びを通して問いが深められた。南部小の船越君は原爆ドームに焦点化し、南中の北澤さんは様々な施設が残されている平和記念公園全体について、残そうとした人々の思いに迫った。直接被爆者の話を聴くことができる最後の世代としての受け止めをまとめることができた。

児童・生徒の発表に続いて、保護者を代表して池上奈央子さんと船越徹也さんのお二人から、広島平和学習に参加しての感想の発表がありました。

池上さんからは、南小六年の舞音さんに対して、さまざまの親子の会話から、広島に行く前にはまとめがきちんとできるか不安視していたが、行ってきた後のまとめの段階になると、表現したいことがあふれてきて新聞形式の中に収めるのに苦労していた姿から、この事業を通して娘さんの成長を感じたこと、保護者自身も、知っているつもりであったことが直接資料に触れる体験を通して、さらに具体的に深く理解できるようになったことが述べられました。

船越さんも、広島に関してはそれなりに知っているつもりであったが、実際に広島で見聞したことで、今までの知っているつもりのことは単なる情報に過ぎなかったことを実感したこと、ネットなどの発達ですぐに答えや情報が見つけられる時代にあっても、こうした現地で実際に資料に触れたり、関係者の話を聞いたりすることを通して、単なる情報から確かな知識と経験になり、未来につながる思いを持てる良い機会になったことが語られました。

お二人ともに、こうした貴重な機会を設けていただけたことに感謝をされて保護者代表の感想発表が締めくくられました。

７月９日（木）の結団式で、隊長の田中副村長から「知ることも大切だが、まずは現地で触れて、見て、聴いて、自分なりに感じることを大切に」のあいさつで始まった令和８年度のヒロシマ平和学習が、たくさんの成果をあげ、尾形教育長の「自己テーマについて、自分の目で見て、耳で聴いて、心で感じたことを自分の体の中で一旦咀嚼して、自分の言葉で表現していたので、説得力がありました。…平和を維持するにはどうすればよいのか？その答えが、今日の皆さんの発表の中にあったと思います。日々の生活場面の中で、具体的に心がけていきたいと思います。」で終了しました。10 月下旬に村のホームページに発表資料を公開します。ご覧ください。